2022年　戦争体験を語り継ぐ集い

＜第２９集＞戦時体験記録集

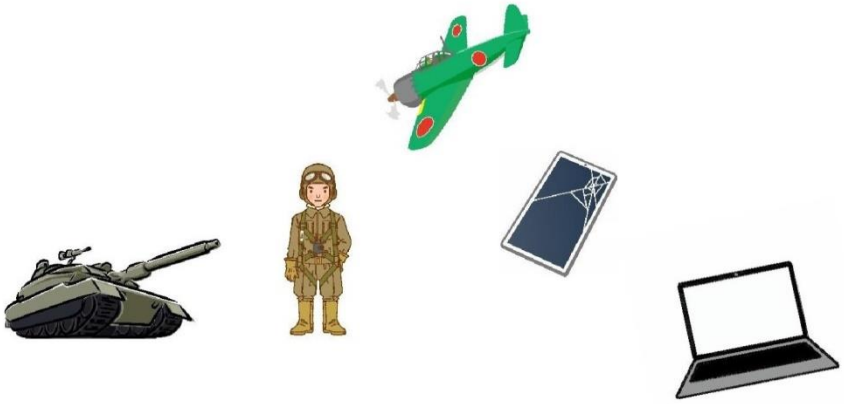
世界中を巻き込んだ戦争が始まっている

私たちは戦争に加担していないだろうか

本当のことを見抜いているだろうか

戦争体験を語り続けることが

身近な平和や命を守る一助になりますように



戦争になると　人が人ではなくなります　命が命ではなくなります

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

名古屋市緑生涯学習センター主催の事業です。進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当し、行政と市民が協働した取り組みを続けています。

戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦争が始まった時の現実はどうだったのか、戦時下での暮らし、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの毎日を過ごさなくてはならない、厳しい現実になることを、伝えています。戦争の悲惨さを伝えることで、平和と平和を守る大切さを、考えていただける機会にしていただくことを願っております。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

◇戦時体験記録集について

実際の「戦時体験」を投稿してくださる人が急激に減り、体験者の次の世代の方たちが親の思いをつなぐという時期になりつつあります。それでも、変わらぬ平和への願いを込めて、今年も作成いたしました。二度と悲惨な戦争を繰り返さないために、体験された方の思いが少しでも届きますように。興味関心を持っていただける方へ、その周りの方へとお届けできたら嬉しく思います。この冊子を手に取ってくださる皆様から、平和への祈りが広がりますように。

◇戦時体験記録集の歴史その１

長年紡いできた記録を残す活動として「戦時体験記録集」の制作を続けています。今回は、その歴史の一端をふり返ってみました。ぜひご覧ください。そして来年はもう少し内容に踏み込んだ記録を残したいと思っています。引き続き最後までお読みいただければ幸いです。

今年も「戦争のない平和な世界を！」との熱い思いと、賛同していただいた皆さまのご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会　一同

第３３回『戦争体験を語り継ぐ集い』プログラム

令和４年７月２３日（土）１０～１２時

１．　開会の挨拶

２．　緑生涯学習センター中村館長より

３．　語り継ぎタイム（１）

・緒川文子さま　　（P１）

４．　展示品説明（関谷俊雄さん）

休憩（戦中戦後の食糧試食）

５．　語り継ぎタイム（２）

・宮田隨麗さま　　（P３）

６．　すいとん説明（小南祥惠さん）

７．　閉会の挨拶

＜第２９集＞戦時体験記録集

◆目　次◆

＊語り部タイム＊

電話が太平洋戦争でどのように活用されたか！
戦争体験語り継ぐ会 会員（緒川文子）　－－－－－－－　P1

『“兵士の子どもたち”の体験をも語り継ぐ』
－戦争体験者の経験が世代を超えて及ぼす影響とは－
（西山浄土宗慈雲寺住職・旅行ライター　宮田隨麗）　－－　P3

＊2021 年語り部タイム記録＊

在満少国民の戦中・戦後体験
ピースあいち語り手の会 会員（松下哲子）　－－－－－－　P5

紙芝居＊有松俘虜収容所の話【戦争の時代＊お灸と指輪】　－－　P１６
有松俘虜収容所紙芝居と伝えていくこと（福岡友一＆上田英二）

すいとん試食会について（小南祥惠）　－－－－－－－－　P２２

＊戦争体験を語り継ぐ集い＊

戦時体験記録集の歴史その１　－－－－－－－－－－－－　P２４

＊語り部タイム＊

電話が太平洋戦争でどのように活用されたか！

戦争体験を語り継ぐ会 会員　緒川　文子

１．　電話の歴史は１８７６年（明治９年）にアメリカのベルによって発明され、今日は誰もがスマートフォンで話をする時代に発展してきた

２．　夜間通話の開始（明治４３年）

３．　電話の戦時活用（昭和１２年）
日本軍の中国侵略で戦時体制に入っていき、電話も大きく活用の仕方が変わってきた
・女子電話交換手の宿直勤務が始まった
・防空通信専用電話制度がつくられた
・軍事用が最優先されてきた

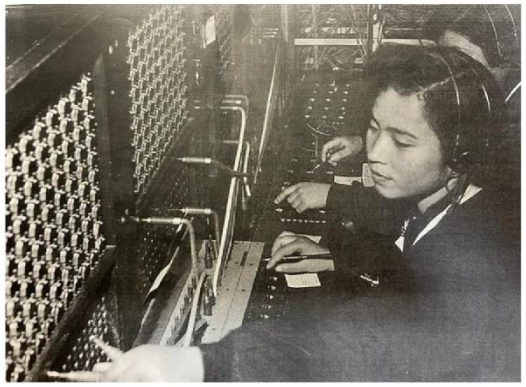
４．　外地通話の拡大（昭和８年～）
植民地政策をとっていた日本はそれぞれの地域との通信網を拡充していった
朝鮮ルート（昭和８年）
台湾ルート、樺太（昭和１８年、昭和１９年）内地通話となる
パラオ（昭和１６年）
日本軍の南進により軍事用としての無線連絡通話開設
通話制限（昭和１６年）
戦時電話の受付は国民動員上必要なものに限ると制限された

５．　国防電話局
非常電話局の開設
空襲などの被害で通信が途絶えた場合、国土防衛上緊急通話の確保のため開設
（郵便局、分局の地下室に設置されていた）

６．　通信の検閲（昭和１９年）
通話検閲局で内容、重要と認めた通話容疑者のした通話の参考となる通話は録音盤へ録音し参考とする

７．　電話交換手の最期
東京墨田局の「命ある限り通信を守る」と、交換台の前で「さよ　うなら」と交換台に打ち込み、全員が殉職した話、サハリンの交換手が「ロシア兵がきます、さようなら」と全員自決した話は有名である

以上、まとまっていないが、戦争当時の電話交換手の通信を守り抜いた彼女たちの話である。



1910 明治43.9.11 特設電話加入申請受理

明治43.8.26 特設電話交換事務開始 東西三都の商取引盛大になる。

單独加入 29名 電話所設置・交換機据付などで張札

(交換業務創始に就ては服部孫兵衛外4名 金4百有余圓大拡張の部付を以て創始請願に基く)

鳴海・大高両所とも当分区域

1910 明治43.11.12 内容証明郵便引受局に指定される。

1911 明治44.2.16 加入者1名増設、30名となる。

〈有松絞り業界不振〉

1928 昭和3年 県道(郡道)大府街道昇格改修竣工 鳴海町への交通が一段と便利

※ 山車会館正面にある花崗岩石道標誠が三角かどに建つ

1929 昭和4.12.27 日本放送協会東海支部名古屋放送局鳴海町放送所開所

※ 町道が整備され一気によくなる。

1930 昭和5年1.1 東海道・県道と交さく角に加茂明美(局長)自費で郵便局新築・移転

有松町大字有松字橋東南入口番戸 ※昭和初期の公共建物としては貴重な構造であった

1931 昭和6年3.31 集配事務取扱開始

局長以下3人名 男11名女子20名の大世帯となった。

集配区域 有松町、豊明村、鳴海町

市内 有松町大字有松 鳴海町大字大脇・根・有松裏・米塚・蛇ヶ山

市外 豊明村 有松町大字鳴海町

〈有松絞り ~~衰退深まる~~ 戦後の復興・復古調と絞り町並みブーム〉

1947 昭和20.8.1 無集配特定局となる。鳴海普通局昇格による

1963 昭和38.10.6 電話交換業公移管

1965 昭和40.9.1 名古屋有松郵便局に局名改称 名古屋市に有松町合併による

1998 平成10.11.9 新局舎完成 自費、局員加茂満宏

NHKラジオ郵便列車今日の動き、全国放送 テレビ中継放送 北陸3県・静岡県も放送 民放テレビ3県ローカル放送

郵便局の公共建物が伝統工芸有松絞りで有名な名古屋市有松町並み保存地区の目ぬきに誕生、観光客誘致の一役買ってくれるでせう。

1917 大正6 愛知電鉄有松線開通 神宮前-有松町 呂田三

1921 大正10 有松公設市場の設置 〃

1927 昭和2 有松尋常高等小学校校舎建設移転

1929 昭和4 有松幼稚園常時託児所として開園

〈有松絞りの衰退深まる〉

1937 昭和12 日支事変勃発

1941 昭和16 大東亜戦争に発展

1945 昭和20 大東亜戦争終結

〈戦後の復興〉

1947 昭和22 新制有松中学校の設置 南局長 浜島

〈有松絞り振興発展期〉

1952 昭和27 有松町々制60周年

1953 昭和28 朝鮮半島に動乱

1964 昭和39 名古屋市に合併

1973 昭和48.4 「有松まちづくりの会」誕生

『“兵士の子どもたち”の体験をも語り継ぐ』

ー戦争体験者の経験が世代を超えて及ぼす影響とはー

西山浄土宗慈雲寺住職・旅行ライター　宮田　隋麗

◎戦争体験は体験者本人だけでなく、配偶者、家族、友人、さらには次世代以降にも大きな影響を及ぼす。

◎NHK のドキュメンタリー「戦跡」
精神疾患に苦しんだ兵士たちの心の傷「50 年間、口外してはならない」極秘調査｜千葉県の戦跡 薄れる戦争の記憶 NHK
→精神疾患を発症した兵士だけではなく、帰還兵の多くが PTSD を抱えていたはずだが、注目されないまま、日本は「経済戦士」へと方向性を変えていったのでは？

☆私の父の場合
　大正１２年生まれ。徴兵により招集された後、陸軍予備士官学校へ入学。卒業後、少尉に任官されインドネシアで小隊長。
　戦後、オランダ軍の収容所に入れられた後、脱走して（？）インドネシア独立運動に協力。
　最後の引き揚げ船で日本へ帰国。数年後、母と出会い結婚。１９５１年に私が長女として生まれる。１９５４年に弟が生まれる。
　戦後は叔父が経営していた鉱山の経営を引き継ぐ。その鉱山が合併吸収後は、合併先の会社でサラリーマン。退職後はコンクリート学会の理事を７５歳まで務める。

◎父は戦争についてほとんど語らなかったが、「戦場では誠実な人間から死んでいく。生き残った者は、皆、ずる賢く動いただけだ」と言ったのが強く印象に残った。

◎父の従兄弟の一人が戦争末期に海軍士官学校に入り、戦後、第二次大戦の戦没者顕彰運動に熱心。父は「従兄弟が実際には戦場に行かなかったから、分かってないんだ。」と発言。

◎父は６０代になるまで、声をあげて笑うことはなかった。しかし、出征前の写真は笑顔ばかり。私にはかなりの衝撃。

◎７０年安保運動や学生運動の激しかったころ、戦争について非難する私に、父は「あれ以外の選択肢はなかった」と強く主張

◎父が抱えている暗く、重たいものが、戦争に根ざしていることは明らかだった。私も弟も父を理解しようと苦しんだ。母は鬱病を発症した。

◎父は歴史好きで神社仏閣にしばしば家族と出かけたが、けして手を合わせなかった。→母は「お父様は神も仏もあるものかという経験を何度もなさったからだ」と理解→私の出家に対しては「信仰はお前個人のもの」と父は反対せず。

◎父は「自分の未熟な指揮のために、何人も犠牲者が出たし、相手方にも無用な犠牲者がでた。ジャングルに遺体を残したまま退却したこともある。そんな自分が葬式をしてもらう権利はない」と早々に献体を決めた。

◎人を殺した経験を持つ人間に育てられた「兵士の子」の経験、とりわけ親子関係については、今語らなければ消えてしまう。
　二次的ではあっても、「戦争体験」として、語り継ぐべきだと思う。

２０２１年　語り部タイム記録

在満少国民の戦中・戦後体験

ピースあいち語り手の会 会員　松下　哲子

今からもう 80 年も昔のことですが、当時満州国にいた子ども達は在満少国民とよばれていました。私もその一人で、これから、日本におられた方々の、空襲とか、学童疎開とは違った戦中戦後体験をお話ししようと思います。

私の戸籍謄本には、昭和９年、満州国本渓湖市生まれとあります。今年 87 歳です。本渓湖は鉄で知られた所だと聞いていましたが、私の記憶には何も残っておりません。３歳か４歳から後は、終戦後の引き揚げまでずっと奉天という街で過ごしました。今の中国では瀋陽、遼寧省の省都で、かつては清朝の本拠地でもあり、郊外には北稜と呼ばれる大きな陵墓がありました。

私の父は熊本の農家の三男で、中学校出るとすぐに、大正の中頃ではないかと思いますが、当時すでに中国に渡っていた兄を頼って中国に行き、満鉄に勤め始めたようです。

満鉄というのは国策会社で、日露戦争が終わった時に、ロシアが中国国内に敷設していた東清鉄道の権益を受け継ぎました。なんでも、鉄道の沿線の鉱山を始め 、森林、漁業等に係る権益をも持っていて、それらから莫大な収益を得ていたということです。

満州国の建国は 1932 年（昭和 7 年）3 月 1 日。中国東北部の黒竜江省・吉林省・遼寧省を国土としています。形の上では独立国ですけれど、当時世界の大半の国が認めてくれていない、日本の植民地国家でした。資料に書いておきましたが、「満州国国歌」がありまして、祝祭日に学校では「君が代」を歌った後に「満州国国歌」を歌ったものです。今考えると、ちょっと奇妙な気がしますが、日本語の歌でした。

私が子どもの頃、すでに日中戦争は始まっていましたが、戦争の気配も多分日本の国内よりも感じることが少なかったのではないかと思います。後で話に聞いたところによりますと、日本では禁書とされていたマルキシズムに関する本なども、満州では割合自由に手に入ったそうです。今振り返ってみても、植民地の自由な雰囲気の中で、恵まれた子ども時代だったと思います。もちろん、その生活は中国の人々の暮らしを踏みつけにした上のことでしたが、当時はそんなことは考えもしませんでした。

昭和 16 年、太平洋戦争が始まる年の 4 月に、私は高千穂在満国民学校に入学しました。国民学校というのは、私たちが入学した年に始まって、戦後の 22 年、卒業した時に終わりました。ですから、昭和 9 年生まれと、昭和 10 年の早生まれの人は「小学校」に行ってないんです。私は、息子たちが子どもだった頃に「お母さんは、小学校に行かないで、中学校と高校に行ったんだからね」と言って不思議がられておりました。

高千穂国民学校は赤レンガ二階建ての校舎で、冬になると教室にはスチームが通って、寒さを感じることなく勉強ができました。もっともこれは昭和 18 年まででしたけど～

満州の学校にも日本の学校と同じという奉安殿が校門の横にあり、校庭の一隅には天照大神を祀った高千穂神社まであって、それは「我々の遠い祖先」で、日本は神の国だと教えられました。また「日本国民は優秀だから、五族協和のリーダーであるべき」だと、校長先生は訓話のなかでよく言われました。五族協和というのは、満州の建国理念で、大和民族の日本人を筆頭に、漢民族・朝鮮族・満州族・モンゴル族が協和して王道楽土を築く、という内容でした。後から考えると、歪んだ優越感を植え付けられたと思いますが、当時は何の疑問も持たず、学校生活を楽しんでいました。

当時の思い出の中で一番楽しかったことといえばスケートです。冬は零下 20 度ぐらいになるので、12 月に入ると、すぐに満人の用務員さんが、校庭に円形の低い土手を作って、中に繰り返して水を撒いているうちに氷の厚さが増し、スケートリンクが出来上がります。1 年生や初心者は、滑り始めに転ばないように、自分の椅子を持って行き、それにつかまって滑る。だんだん上級になって、スピードが出せるようになると、外側の長いコースで滑るのが楽しくて、放課後はもちろん、休みの日も明るい間は滑っていました。

そんな中で迎えた昭和 16 年 12 月 8 日、その日のことは、ラジオで「軍艦マーチ」が景気よく何度も流れていたのを私も聞きました。学校では校長先生が大変興奮してお話をされた覚えはありますが、実感としては戦争はまだ遠いものでした。

なんだかおかしくなってきたな、という気がし始めたのは、昭和 19 年の春ごろだったでしょうか。学校の友達の多くが、お父さんの仕事の関係からか、日本に引き揚げ始めたのです。教室には空席がいっぱいで

きて、あの人も、この人もいなくなる日が、続きました。それと共に学校では授業の時間が少なくなって、登校するとすぐ、ヒマという植物の種子が入った小さな紙袋のを先生から渡されます。ヒマをご存知でしょうか？そのころ、何か悪いものを食べてお腹が痛くなるとヒマシ油という下剤を飲まされましたが、その原料のヒマです。うずら豆ぐらいの黒いぶち模様の種子で、油分が多く、沢山集めて飛行機の潤滑油にすると聞きました。満州は広いですから、郊外に出て、「きょうは、ここにしましょう」と言われるとそこが畑。スコップで小さな穴を掘って種子をまきます。「これも皆さんのお国へのご奉公です」と言われて、そんなものかと思っていたような気がします。

昭和 19 年の冬になると、石炭が民需用に回らなくなったといって、教室の暖房が入らなくなりました。マイナス 20 度という寒さ、名古屋ではちょっと想像し難いかもしれませんが、当時はマスクをかけて毛糸か毛皮の帽子をかぶるのが常で、マスクの上部から息が出ると、帽子のひさしの部分に小さなつららができるという具合。汚い話で恐縮ですが、男性用のトイレでは、下から氷の柱が伸びてくるという状態でした。

暖房なしの教室では、オーバーを着たまま、手袋もはめたまま、帽子もかぶったままでも手がかじかんで動かなくなってしまいます。朝は温かかったお弁当も、昼には凍り付いて蓋が開き難くなる。そうした状態から、なんとなく日本は大丈夫かなというような不安が湧いてくる時もありましたが、でも、そんなこと、友達にでもうっかり言おうものなら、たちまち「非国民」呼ばわりされかねませんから、親からは、外では戦争に関して、不満や不安を漏らしてはいけない、と釘を刺されておりました。

この年の秋、私の家では兄が学徒出陣で行ってしまいます。兄は、本当は飛行機に乗りたかったらそうですが、近眼だったので諦め、上陸用舟艇という鉄製のボートの両側に爆雷を抱いて敵艦に突っ込む訓練を受けていました。そして、終戦の年の５月ごろにフィリピンに向けて出航し、途中、台湾に寄って水や食料を補給してる間に、米軍の空爆で、輸送船を沈められてしまいました。後続の船が来ないまま、台湾でもたもたしてるうちに終戦を迎えて、私たちの引き揚げより早く無地に復員、88 歳まで生きて先年亡くなりました。

昭和 20 年の８月初め、昼間に突然帰宅した父が、ソ連軍が攻めてくるらしいから今からすぐ疎開しなければならん、と言いました。私は夏

休み中で家にいましたが、本当に足元から飛び立つ様な慌ただしさで手回り品だけを持って奉天駅に向かいました。父と姉は同行を許されませんでした。

訳も分からず乗り込んだ汽車に揺られて、降ろされた所は平壌（ピョンヤン）です。当時は日本の支配下にありましたから、大同江のほとりにあった、日本旅館で寝起きすることになって、そこで、８月 15 日を迎えます。思えば、私の本当の戦争体験はこの日から始まったと言えましょう。

８月 15 日、いわゆる玉音放送は朝鮮半島でも流れました。戦争に負けたそうだ、と母たちが泣いていましたけど、私を含め、疎開仲間の子ども達は日本の敗戦という現実をよく呑み込めないでいました。

でも、その夜のことは、忘れられません。大同江の海岸で、花火が盛んに上がるのです。それと共に「マンセー！マンセー！」という歓声が聞こえてきます。マンセーというのは「万歳」です。一晩中響いた花火と歓声を私たちはじっと息を潜めて聞いていました。

これからどうなるのだろう？先の見通しなど全く立たなくて、ただお父さん、お姉ちゃんはどうしているかな？戦争に負けてしまったらお兄ちゃんは帰ってこられるのかな？とそんなことを心配しておりました。

間もなく日本旅館を追い出されて、私たち満鉄の家族は、少し離れた所にある国民学校の講堂に収容されました。学校は既に朝鮮の管理下にあって、私たちはちょうど自然災害が起こった時に学校の体育館などで避難生活を送る、あれと同じ状態におかれました。食事はバケツで運ばれてくる、コウリャンのお粥と、何が入っているかわからないどろどろのお汁。それまでは曲がりなりにも白いお米のご飯を口にしていたのに、その時には、とにかく、食べなくては、という気持ちだけで、ほかに選択の余地はありませんでした。

母と４歳の弟と、先の知れない我慢の日を重ねていた８月も末近いある日、突然数人の満鉄の人たちが迎えに来てくれました。その中の一人は父でした。帰りは貨物列車でしたが、一月足らずの平壌暮らしの後で私は再び我が家にたどり着き、姉にも再会できました。後になって思うと満鉄という巨大な組織があったから、そしてそれが敗戦になってもまだ生きていたから、私たちは助かったのではないでしょうか。個人で渡満、或いは組織が機能しなかった方々がご苦労なさったことを知ってみると、本当に申し訳ない気がしてなりません。

帰ってきた奉天の街にはこれまで見たことのなかったソ連兵が溢れていました。本当に怖かった！マンドリン型で肩掛けの自動小銃、連発

です。
９月末から 10 月初め頃になって奉天の街には異様な姿の人たちが見られるようになりました。人々の多くは満州の北の方、ソ満国境に近い辺りで開拓事業に従事していた、満蒙開拓団の方々で、ソ連の侵攻と敗戦で中国の農民ににも追われる立場になったため、満州の荒野を、想像を絶する苦難の逃避行の挙句、やっと奉天にたどりついたというのでした。全身垢にまみれて真っ黒けで、目だけが光って見える人々、満州は 10 月にもなると夜は寒く、その中で体力を使い果たした人々が次々に命を落とされました。日向ぼっこしてるのかなと思っていると、そのまま亡くなっておられたとか～。
もちろん、その人々を収容する場所はありましたが、不潔な環境の為、発疹チフスが流行ってそれでまた死者が増えた。聞いた話ですが、人が亡くなると、体温が冷えていくので、とりついていたシラミがぞろぞろ這い出して、生きてる人の方に移っていくのだそうです。当時、シラミはどこにでもいて、外出先によってはとりつかれている恐れがあるといって、家に帰ると、母がまず梳き櫛で、頭を入念に梳いてシラミをチェックしました。劣悪な衛生状態の中で、奉天に住居のある者はまだしも、寄る辺のない人々は、本当に気の毒でした。餓死させるよりは、と中国人に子どもを託した親御さんもいたでしょう。のちに残留孤児と呼ばれる人々がここで沢山生まれたわけです。
恐れ嫌われたソ連兵が去って行ったのは、20 年の秋ごろだと思います。その後に来たのは蒋介石の国民党軍で、街の治安が回復して、外出も少し自由になりました。ただ、日本人の多くは職を失い、我が家でも事情は同じでしたから、親たちはいつまで続くかわからない生活の不安を抱えて、大変だったことと思います。家の中の小さな家具や、父母の衣服などが少しずつ消えていきました。売り食いですね。私も、近所の友達と並んで小さな台を作ってもらい、自分の学用品とか人形やおもちゃなどを広げて道端に立ちました。中国人が買うのですが、中には代金を払わずにひったくって逃げる者もいます。そういう時でも、絶対に手出しをしてはいけない、と言われていたので、悔しくても泣き寝入りでした。お雛様を買ったのは、娘とお父さんらしい二人連れで、この二人のことはなぜかよく覚えています。あのお雛様、どうなったかな？と時々思い出すたびに、女の子の顔が浮かんでいました。
昭和 21 年になって、お正月明け頃でしたか、国民党の軍隊がいなくなって、代わりに来たのが、人民解放軍です。当時は八路軍、パーロって呼んでいました。八路軍は服装もまちまちで、中には、わらじをはいている兵隊もいましたが、規律は非常に厳しく、私たち日本の子ども見てもニコリともしませんでした。ただ、日本人の生活を脅かしてはいけないという戒めがあったようで、物を取りに来るといったことはなく、こちらが差し出したものを受け取ることもありませんでした。

この年―昭和 21 年の春頃から日本人の引き揚げが始まりました。最初は満蒙開拓団など、主として北方から避難してきた人たちです。奉天に家がなくて、収容所にいた人々が、最初に帰って行きましたが、私たちはまだいつ帰れるか分からない不安のなかにいました。
引き揚げがはっきりしたのは８月の初め。この時も急で、と言ってもいつでも出られるように準備はしていましたが、引き揚げの途に着いたのは８月の３日か４日だったと思います。奉天駅から乗り込んだのは貨物列車、大きな戸を閉め切ると真っ暗です。葫蘆島につくまで何度も貨物列車を乗り換えましたが、怖かったのはフラット。ご存じですか？自動車なんかを積む、周囲に枠がない台車です。それに乗った時は、真ん中に荷物を積み上げてその周りに女性や子どもたちが荷物を背に固まり、一番外側を男性が取り囲むという態勢で、台車の周りには一応ロープを巡らしてはいましたが、列車が揺れたり、カーブに差しかかった時などは、誰かが落ちたら？と恐怖でいっぱいでした。おまけにフラットに乗った時に、夜、雨が降ったのです。８月も半ばを過ぎると満州の夜は冷えます。雨は冷たくてとても寒く、歯がカチカチ鳴ったのを覚えています。
奉天から日本に行くのに普通ならば一昼夜見ておけばよかったのではないでしょうか。でも引き揚げの時は、葫蘆島まで行くのに３週間近くかかりました。列車でちょっと走っては降ろされて、収容所らしい所や時には掘っ立て小屋に何日も留め置かれるという旅でしたから。
やっと葫蘆島にたどり着いて乗せられたのはアメリカの船で、LST42 号と大きな文字が書かれていました。日本は戦争で多くの船を失い、海外の邦人を運ぶことができなかったので、アメリカが出してくれたのは、上陸用舟艇を運ぶ、大きなフェリーボートみたいな船です。戦時には船底に鉄のボートをたくさん積み込み、敵の海岸近くまで行くとボートを下ろし、兵士を乗せて上陸作戦を開始する。そのボートが乗る部分に私たち引き揚げ者が積み込まれたんです。船倉はとても蒸し暑く、息詰まるようでした。途中で、台風にも遭い、初めて経験した船酔いの苦しかったこと、忘れられない体験です。

船中での食事はひどいものでした。主食のほとんどがコウリャンで、かぼちゃのつる？かと思われる堅い干物が浮かんだ塩味の汁が印象に残っています。引き揚げの長い旅は衛生状態、栄養状況に最悪で、子どもの多くがトビヒという吹き出物が全身にできて、それをかくと、また痒くてたまらなくなるんでですが、私も弟も多分二目と見られた格好ではなかった状態で、佐世保に着きました。

そうして父の郷里である熊本市の郊外にたどり着いたのは８月31日の夜でした。なぜその日をはっきり覚えているかというと、次の日が八朔の節句といって、農家では、二百十日のお祭りをする日だったからです。やっとたどりついた、とばかり転げ込んだ私たちに、叔母が白いご飯と野菜の煮しめ、九州では、アゴという、トビウオの干物を出してくれました。世の中にこんなにおいしい食事があったんだという思いで食べたのを思い出します。

これで私の引き揚げ体験のおはなしは終わりますが、二度としたくない体験ではあっても、私は幸い家族そろって帰国することができました。それだけに、帰国を望みながらその願いを果たせなかった人々のことを知っていただきたいという思いが強くあります。

満州での終戦後の１年間、本当にいろいろなことがありました。

中で決して忘れてはならないと思うことをお話します。

先に苦難の逃避行の挙句、奉天で亡くなられた開拓団の方々が沢山おられたというということをお話しましたが、その方々はその後、どうなったでしょうか～。

印象に残る風景の一つが、昭和２１年の春先のことです。奉天の街中で亡くなった避難民の人たちは、はじめは市内の天理教教会の広場に大きな穴を掘って、そこに埋められていました。遺体が多いので、一人ずつではなく、遺体を並べては土をかぶせ、またその上に並べては土をかけ・・、という状態だったそうです。しかし、数多くの遺体を市中に埋めたままではいけないというというだったのでしょう、春先に掘り出して、どこかへ運んで行ったので。中国でターチョとよんでいる、３頭ぐらいの馬が引く大型の馬車に遺体を積みあげてむしろをかぶせる、一応、見えないように、という配慮はしているけれども、端の方から、真っ黒になった手や足がにゅっと突き出してるのがのぞき、その馬車が通る時

には凄まじい死臭があたり一面に立ち込めて、家の中にまで漂ってくるのです。母に、「見てはだめ！」と叱られても、怖いもの見たさで窓からのぞいていました。あの人たち、どこに行ったんだろう、どこかで野ざらしになっているのではないか？人々の魂は今も、満州の広野、中国大陸のどこかをさまよっているのではないか？と思うようになってから、なぜその人たちはそんな目に合わなくてはならなかったことを考えるようになりました。また、国民をこうした羽目に追いやる国とは何だろうということも。

開拓団に関する資料を読んだり、帰国された団員のお話を聴いたりしてみると、「開拓」というものの、実際は中国の人々の耕作地を二束三文で買いたたく、或いは武力で農民を追い払ってその土地に日本の開拓団を入植させる、というようなことを日本の政府がやってのけた。開拓団の人々は自分でやったことではないのに、日本の敗戦と同時に中国農民の恨みや憤りの矢面に立たされてしまい、悲惨な運命をたどることになりました。もし国と国のとの話し合いで、平和の裡に移民としての入植であったならばこんな悲劇は起こらなかった。日本の国の侵略という愚行で、落とさないでもいい命を落とした人々がこんなにも沢山いたことを忘れてはならないと思います。

もう一つ、「残留婦人」という言葉をお聞きになったことがおありでしょうか？残留孤児の存在はよく知られておりまが、残留婦人のほうはあまり知られていないようですね。「残留婦人」というのは、終戦当時13 歳以上で様々な事情から引き揚げの時期を逃してしまった人たちのことです。戦時中、若い男の人たちは次々戦場に送られて行きましたから、働き手として若い女性が満州に渡ってきました。学校の先生も、師範学校出たばかりの若い女性が多かったように思います。敗戦後、組織が解体されたり、家族と離れ住んでいたりして後ろ盾を失った人たちは同胞と共に引き揚げる機会を失し、生活の為にやむを得ず中国人に使われたり、結婚したりしました。また家族でいても、幼い弟妹を飢えさせないために、お姉ちゃんが中国人の所にやられたということもあったそうです。

そういう人たちが沢山いたとことを、私は帰国してから知ったのですが、国は、彼女たちが自分の意志で残った、とみなし、帰国を望んでも身元を証明し、帰国後の身柄を引き受ける人がいないと帰国を認めないという措置をとっていました。日本人が日本に帰るのに、どうして身元保証人が必要なのか、国はこの人々をも捨てたのだと思いました。その後、残留婦人への支援団体ができて、帰国する人もいましたが、望郷の

思いを抱きながら、中国に留まった人もまた多かったのではないでしょうか。

日本政府は満州国に 100 万人を送り込むことを企図していたそうですが、1945 年には満蒙開拓団、満蒙義勇軍あわせて約 27 万人余りの人々がソ満国境周辺に散在していました。ソ連の参戦、日本の敗戦でその人々は居住地を追われ、銃撃に倒れ、集団で自決、逃避行で命を落とす等々で 7～8 万とも 10 万余ともいう、数多くの尊い命が失われたのです。

二度と、他国を侵略してはいけない、若い人たちに、私たちの世代が味わったような体験をさせてはならない、と心から思っています。

そのためには歴史をしっかりと学んで欲しい。中国や朝鮮半島の人々は、日本との関わりをかなり詳細に学び、資料なども目に触れやすい形で残しています。私は 1985 年の春から 1 年間、北京で日本語の教師を務め、帰国してからは残留孤児の人たちのお世話を 10 年余りさせてもらいました。中国には、日本からのからの留学生が沢山いましたが、中国の学生から「日本人は日中戦争のことをあまりよく知りませんね」と言われて、恥ずかしい思いをしたことがあります。また残留孤児やその二世の人たちが周辺の日本人から心無い言葉を投げられて傷ついた、という例をいくつも見聞しています。

日本人が、無意識に発する言葉が隣国の人々を、或いは歴史のなかで翻弄されてしまった同胞を傷付けてしまうのは、歴史の学びが足りないからだと思います。知らないで言ってしまう、知らないでやるというのは、ある意味、故意での言動よりもっと始末が悪いのではないか、と私は思います。

日本は古くから中国大陸の国々や朝鮮半島と関わってきて、文字を初めとして様々な恩恵を受けてるわけです。漢字を基にカタカナやひらがなができましたし、ほかにもいろいろと学んだことは多いはずです。そのお返しが侵略だとしたら、本当に残念なことだと思います。

以上でお話は終わりますが、これからの時代を生きる皆さんには、どうか近隣の国と仲良くしていっていただきたいと願っています。

【会場からのご質問】

貴重なお話を有難うございました。お話の中で、日本人が知らないでやる恐ろしさ、ということがあったんですけど、もう少し事例があるならば教えていただきたいと思います。

【松下さん】

「知らないでいる」というのは、主として歴史に関することが多かったんですが、私は、北京第二外語学院という外語大学の日本語科にいたことがありまして、その大学には日本からの留学生がかなりの数おりました。彼らは中国人の学生と同じ学生寮で暮らしていたんですが、その中で、彼らが日中戦争のことを詳しく知らなくて、中国の人たちを、軽く見るような言い方をした、とか、中国の学生が言いに来るわけです。「日本人と話をしていたら、戦争のことを本当に知らなくて、私たちが大げさな話をしているみたいに言われた」とかですね。今韓国や中国の人たちに対して、ヘイトスピーチをしている人たちも、たぶん、日中、日韓の長い交わりや日本が過去にしてきたことを知らないでいると思うのです。知っててやっているとしたらよほどたちが悪いけれど、私はそこまでは考えたくなくて、やはり歴史をちゃんと知らないからだろうと思っております。

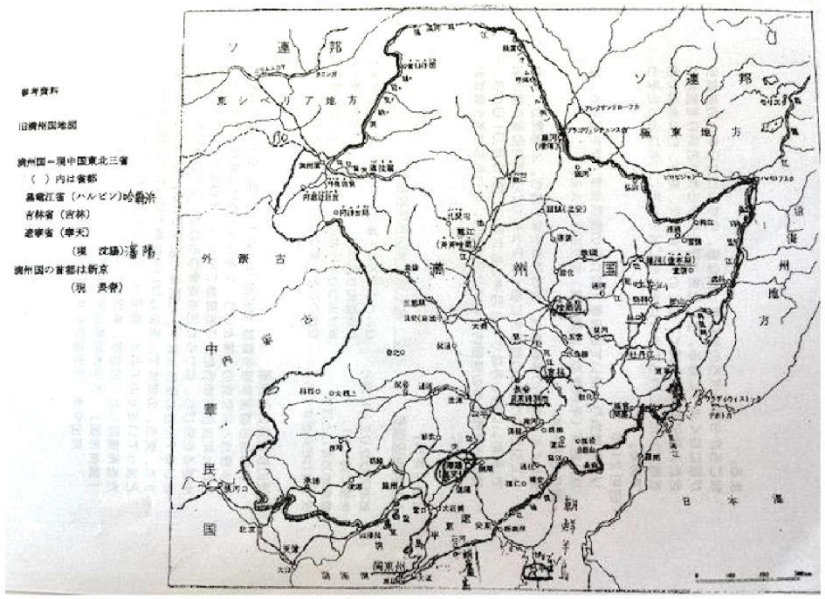
【会場からのご質問】

ちょっと確認したいのですけど、引き揚げられたのは 21 年のことですね？

【松下さん】

そうです。昭和 21 年です。昭和 20 年の 8 月 15 日が終戦ですよね。それから 1 年間、奉天で暮らしました。その 1 年間が私にとっては、実質戦争体験ということになりますね。

戦争中は、満州では空襲などはほとんどありませんでした。B29 がきたとはと聞いたことはありますが～。それから食料は途中からかなり逼迫してきました。お米が少なくなってきたんです。満州では大豆がたくさんとれますので、お米半分、大豆が半分みたいなご飯が日常でした。今だったら大豆ご飯は、結構おいしい、と思うんですけど、当時は、また豆ごはんか？！という感じでしたね。でもひもじい思いはしないで済みました。食べ物についてはともかく、戦後の 1 年間はとても大変な時間でした。



有松俘虜収容所紙芝居と伝えていくこと

福岡友一＆上田英二

＊戦争中に緑区の有松に俘虜収容所があり、そこでの出来事を紙芝居として制作しました。紙芝居を通して有松俘虜収容所のお話を伝えていく取り組みを続けています。

【福岡さんのお話】

僕は昭和９年生まれで、有松に生まれて有松でずっと育ったわけです。有松あないびと会で、たまたま有松に捕虜収容所があったと言われ、僕が捕虜の絵を描いて会の上司に渡しました。それから５年くらい経ったころ、東丘コミュニティーセンターで天野鎮雄の捕虜の講演会があり、掲載写真が絵とそっくりだったことで、有松あないびと会の上司から「紙芝居を描いてくれんか」と頼まれ、描く気になったわけです。僕が小学校４年生の頃を思い出して描いた絵と一致したので、かなり記憶もよかったと思います。

もう一つ、紙芝居の話より後ですけど、名古屋の空襲の爆撃で爆弾を落としとった大きなB-29がずっと来とったわけです。８月１５日に戦争が終わって、１週間たたないうちに、同じB-29が、今度は捕虜のところへ救援物資を落下傘から落として届けたのが、不思議だと思っていました。１週間前にあれだけ爆弾ばっかり落とした飛行機が、今度は落下傘でチューインガムとか食料品を捕虜の収容所の屋根の上から落としたわけだから。１週間前は、飛行機のパイロットが見えるくらいまで低空で飛んで来た。けれど、飛行機に対して一切害を与えることなく、日本って大したもんだと思いました。１週間のことで、くるっと変わっちゃったと思います。B-２９のパイロットが僕らの屋根すれすれくらいまで降りて、落下傘に着けてドラム缶にチューインガムとか食料をいっぱい落として、捕虜の支援をしとったわけです。僕たち子どもは、離れたところに落ちたときに拾って、捕虜の係の人に届けると、お礼としてチューインガムやらチョコレートいただく、それを喜んで、拾ったりしとったわけです。屋根の上にＰＷの字を書いて捕虜の収容所だと飛行機から見えるようにしていたわけです。ＰＷは結局、人質というような意味だったらしいです。日本車両の土地にプレハブみたいな簡単な棟が６棟ばかり建って、３００人ぐらいの

捕虜が収容され、有松の駅から日本車両の熱田工場へすし詰めにされて通っとったわけです。

【上田さんのお話】

それでは、紙芝居のほうへ進めていきます。この物語の地理関係、有松俘虜収容所の場所を皆さんイメージしてもらうために地形のことご説明します。１号線を豊明に向けて走っていきますと、有松の駅があります。一番南側に有松小学校があります。そこからまた１号線を行くと北側に傾斜があって、有松駅まで傾斜になっています。今のイオン有松があるところは大体一番底になる地形で、その間に旧東海道があります。収容所は有松イオンから少し上にあがります。鳴海団地のほうへ行きます。手前には、右手に東丘小学校があり、そちらの高台のほうへ上がっていき、もう少し先に現在日本車両の社宅が建っています。その社宅の敷地がほぼ収容所のあったところです。収容所の残骸、遺跡はほとんどないんですけども、１ヶ所だけコンクリート製の建造物が残っておるということです。私有地に入っていかないとその場所行けれないんです。今、遺跡のことについて戦争の遺産として残していきたいという声もあるようです。紙芝居のお話は東海道筋の絞り会館横にあった棚橋医院（現在の医院は有松イオンの北側に転居）ですが、今でも見学できます。これが終わって興味がある方は見てください。

大体場所は分かっていただけたと思いますので、お話のほうは気楽に聞いてくださいね。小さい子もおられるから。こんな話をする私は昭和 26 年生まれです。戦後生まれの人間が知ったような顔をしてしゃべるのは本当に申し訳ないですけど。始めさせていただきます。

『お灸と指輪』　制作：有松あないびとの会　文：浅野康子　絵：福岡友一

①「皆さんは日本が昭和１６年２０年にかけて太平洋戦争をしていたことを知っていますか。これはその時代に、有松の町のお医者さんだった棚橋龍三先生が体験されたことを紙芝居にしたものです。不幸なせんそうの時代のなかで、一つの「心に残るとてもうれしいお話」です。

②昭和１６年１２月に始まった太平洋戦争はだんだんとみんなの生活を苦しくしていきました。絞りが作れなくなった有松の町の人達は軍需工場へ駆り出されていきました。子どもたちも防空頭巾をかぶって登校、学校では竹やり訓練がありました。空襲警報のさいれんが鳴ると授業は中止、急いで家に帰ったのです。そんな大変な時代でしたが、子供たちは池で泳いだり、野原を駆け回って遊んでいました。高台にある小学校の運動場からは見晴らしがよく、名鉄電車を挟んで向こうに小高い丘が見えていました。ずっと雑木林になっていてパラパラと人家が見えるくらい、有松は緑の多い静かな町でした。

③少し前からその林が削られて運動場のような広場になったのです。何だろうと思っていると平屋建ての建物が六つも出来て町の大人たちの話題になっている。「あそこの丘の上に敵国で捕まえた捕虜たちがくるらしいぞ」。「捕虜たちがそんなに来て町はどうなるんだ」「用心が悪くなるぞ」。まだ見たこともない敵国の捕虜がこの町に来ることで町の大人たちは大騒ぎ。敵国の捕虜が来るのです。まったく今まで考えもしなかったことが起きるのではないか？と思いながらも、みんなは黙っていた。昭和１８年の暮れから、朝夕の有松駅に大柄な捕虜たちを見かけるようになった。

④町の人達は大人も子供も何となく不安で、遠くからそっと見ているという雰囲気だった。ある日の夕食の時、父が「お父さんは明日からあそこにいる捕虜たちの診察をすることになったよ」といった。突然のことで母や私も妹もびっくりした。　私の父は、その頃、町でただ一人のお医者さんでした。父は捕虜のアメリカ人軍医と二人で３００人程の兵士を診ることになったのです。町医者として診察しながらも、父はあまり収容所のことは話題にすることなく忙しくしていました。父の齢を超えた今、私はあれこれと記憶を思い起こしています。

⑤当時、丘の上の収容所には３００名ほどの捕虜が生活し、そこから名鉄電車にぎゅうぎゅう詰めにされて熱田の軍需工場へ働きに行っていたのです。朝になると、駅の北の丘を下り一列に並んで重い足取りで改札に向かう光景が見られました。大きな体の捕虜たちが監視され、体をこん棒でたたかれながら労働に行ったのです。仲間に担がれて帰ってきた人もいたそうです。それを見ていた人は「敵

国の捕虜といえどもとても可哀そうだった」と。捕虜の待遇は厳しく栄養失調、かっけ、腰痛、黄疸などに苦しみながら働いていたそうです。

⑥有松の町の人達の生活も大変でした。全国に有名な有松絞も布がなくては作れません。「贅沢は敵」だったので売れません。今は盛大に行われるお祭りも山車の出番はなく、猩々と天狗がみんなを追いかけるだけでした。それでも子供たちにはとてもうれしい一日でした。お米も配給となり、食事は大根、さつまいもが多く、いつもお腹をすかしている状態でした。ましてや敵国の捕虜に与える薬も食料もありません。それでも捕虜たちは、休日には収容所の敷地内の畑を耕したり、時々は周辺の家から卵を分けてもらっていたらしい。当時は有松でもニワトリを飼っている家が多かったようです。

⑦厳しい状況の中で働く捕虜たちの体調は、日に日に悪くなりました。敵国の捕虜といえども何とかならないか。あれこれ考えた父は思い切って病気で苦しむ捕虜にお灸をやってみることにしました。薬がない中では、お灸が唯一の選択だったことでしょう。お灸は、日本では大昔から行われていた治療方法でしたが、西洋の捕虜にはビックリすることでした。なにしろ皮膚の上にモグサをのせてそれに火をつけるのですから。彼らは、お灸は虐待だ」と思ったのです。それでも父は捕虜の苦しみを少しでも和らげるにはお灸しかないと考えたのでした。

⑧捕虜収容所の医師として働いていて約２０か月経った昭和２０年８月、広島と長崎に原子爆弾が落とされて戦争は終わりました。日本は戦争に負けたのです。連日連夜おびえていた爆撃機の音はピタリと止み、丘の上の捕虜たちに飛行機からたくさんの救援物資が落とされるようになりました。食料などが入ったドラム缶に付けた赤や青のパラシュートがまるで花が咲いたように鮮やかだったと思い出します。収容所の近くに落ちた物を、大人も子供も拾いに行きました。もう戦争は終わったのです。敵も味方もありません。しばらくして捕虜たちの帰国が始まりました。

⑨９月の暑い日のことでした。収容所で一緒に仕事をしていたアメリカ人の軍医さんが父のところへ帰国の挨拶に来ました。戸口から背中をかがめてヌーと入ってきて、軍医は自分がはめていたルビーの指輪を外して父に渡しました。捕虜である彼がお礼の品として渡せるものは、肌身離さず付けていた指輪しか無かった事でしょう。父は大切にしていたトラの絵の掛け軸を渡し言葉を交わして、そのアメリカ人軍医は帰っていきました。当時、小学４年の私は、その様子を戸の隙間からじっーと見ていました。一瞬の、とても不思議な出来事でした。

⑩戦後の町の人達の暮らしはまだまだ大変でしたが、少しずつもとに戻り始めていました。父も町のお医者さんとして忙しい日を送っていました。戦争が終わった次の年の２月、父に一通の手紙が届きました。横浜の裁判所からの呼び出しでした。戦争を裁く「極東軍事裁判」が始まったのです。収容所で行ったお灸の治療が「虐待であった」というものでした。世界で取り決めた捕虜を守るためのハーグ条約・ジュネーブ条約に違反していると判断されたのです。父が横浜の裁判所へ行ってしまった家の中は、シーンとして暗く沈んでいました。母に「どうしてお父さんはかえってこないの？」とは、とても言い出せなかったのです。

⑪母も私たちも黙ってただ父の帰りを待っていました。ところが、とてもうれしいことになったのです。収容所で一緒に働いたアメリカ人軍医が「お灸は虐待ではありません。東洋医学の正しい治療方法です」と証言してくれたのです。彼の証言のお陰で父は罪に問われることなく無罪となったのです。アメリカ人軍医と父の間には一緒に仕事をしている中で、強い信頼関係が生まれていたのだと思います。

⑫その後、父はこの話にはあまり触れることなく、朝から晩まで医者として一生懸命働き、７９歳の人生を終えました。私も誰にも話さないで時々そのルビーの指輪を引き出しから取り出して眺めたり、はめたりしていました。でも齢を重ねた今は、この事実を次の世代の人に語り継いでおくべきだと思うようになったのです。鬼畜米英と教え込まれて、捕虜を敵視するかたくなな心の人が多かった時代でした。国を超え弱った人に手を差し伸べた棚橋先生、そしてその先生を裁判から救ったアメリカ人軍医。どんな時でも「信頼と友情」大切にしたいものですね。（おしまい）

【会場からのご質問】
「俘虜」と「捕虜」の文字の使い方の区別を教えてください。
【福岡さん】
当時は「捕虜」と言わないで「俘虜」と言い、軍から政治的に押し付けられたと思うんですけどね。本当は捕虜が正式な名称だと思います。日本の軍部の大本営から俘虜という言葉を使えってことで、国際的には「捕虜」です。日本独特の、大本営から命令されて使ったわけです。同じ意味です。

戦時中の出来事の一コマを分かりやすく伝える紙芝居

2022年5月20日現在　13回目を上映した

すいとん試食会について

すいとん担当　小南祥惠

「すいとん試食会」コロナ禍のため中止

【小南さんのお話】
「戦争体験を語り継ぐ集い」ですけれど、私は昭和19年生まれで戦争全然何も覚えておりません。そんなことを承知して聞いてください。毎年、この語り継ぐ会が終わると調理室で皆さんすいとんを食べていただくことになっていたのです。今回はコロナ禍のため中止になりました。
この語り継ぐ会は平成元年から始まり、私が引き継いだのは平成21年からです。3代目になりますが、前の方はお亡くなりになりました。この絵（すいとん説明の絵）は13年前の人が作ってくれたのを使っております。
なぜ戦争とすいとんかといいますと、非常に食べるものがなくて困っていた時代だったそうです。日本では食糧の蓄えは乏しく、今のように備蓄米があるわけでもなし、働き手は皆戦争に行って、現代では考えられないような食糧難でした。お米はなく代用食としてさつま芋、ジャガイモ、里芋やかぼちゃなどの葉や茎までもあらゆる食べ物を食べて生き抜いてきました。すいとんは、お米の収穫の少なかった時期に簡単で体も温まり、空腹を満たしやすいことから代用食として広く食されてきました。しかし当時のすいとんは、今の飽食の時代のすいとんと違って、塩水に小麦粉の塊の団子をちょっと浮かしたぐらいのもので、とてもおいしいものではなかったようです。現在では、みそ仕立てとか醤油仕立て、お野菜たっぷり、ちょっとしたお肉も入っているかもしれません。今ではごちそうですよね。

私は15年ぐらい前から豊明で畑をやっており、なるべく農薬を使わない野菜を栽培して、それですいとんを作ってきました。いろんな材料が書いてありますけれども、何でもいいんです。そこら辺にある野菜、おうちで作るなら冷蔵庫の残り物、でも、ごぼう入れるとおいしいです。あとは何でもいい、だしはちゃんと取ってね。だしがまずいとおいしくないです。こういう毎年おいしいすいとんを作ってます。

女性の方で４回もおかわりした方がありました。あっぱれですわ。だから今、私はそういうすいとんしかできないんです。申し訳ないね。戦争中の人から聞いたら罰が当たるかもしれません。

そんなことで、来年またこういう語る会があって、コロナも収まったら、ぜひ私たちの作るすいとんを食べていただきたいと思います。きょうは戦争の体験のない人間がお話ししてすいません。来年はぜひすいとんが食べれるといいいですね。

【会場からのご発言】

あそこに「団子」とありますけれども、小麦粉も今みたいな小麦粉じゃなくて。小麦粉の「ふすま」ってご存じでしょうか？小麦の殻ですね。それを細かくしたもので、とてもばさばさしていて、まずかったです。それから、さつま芋で思い出すのは「農林１００号」っていう名前で大きいんですね。家畜の餌にするので、ほとんど甘みも何にもありません。しゃびしゃびで。そういうのが一杯入ってて。かぼちゃも今のはおいしいですけど、甘みも何にもなくって。それでも食べられるだけありがたいという時代でした。栄養失調とかそういう言葉が本当に日常茶飯事のように使われてた。そんな時代は２度とごめんだと思います。やっぱりおいしいすいとん食べたいです。

＊戦争体験を語り継ぐ集い＊

戦時体験記録集の歴史　その１

戦争体験を語り継ぐ集いは平成の幕開けと共に始まりました。

当時、緑社会教育センター（現緑生涯学習センター）を利用しているグループの代表に呼び掛けて「戦争体験を語り継ぐ」ことをめざした活動がスタートしました。１回目の打ち合わせには５０名弱が集まりましたが、回を重ねるごとに減り、３回目の打ち合わせに集まったのは６～７名ほどでした。そこで他団体に協力を依頼して、集いの開催に向けて本格的な準備が始まりました。

この体制で３年継続し、その後も青年会の協力など、継続のためにいろいろな協力体制を組み、今日まで続けてきました。

長年リーダーとして実行委員会をまとめ、多大なる尽力をいただいた故橋詰四郎さんは、シベリア抑留から生還された方でした。「子や孫にこんなひどい体験を絶対にさせてはならない。世界に戦争がなくなるまでこの集いを続けたい。」という一心で活動を続けてこられました。あまりに情熱があり、公の施設では差しさわりがあると、この集いの場ではほとんど発言されず、常に裏方に徹し、語り部さんの発掘を続けてこられました。

平和と命を守る熱い思いで活動を続けていきましたが、残念なことに、まだ多くの地域で戦争は終わっていません。今年は特に世界中が（情報戦という戦争も加わり）に巻き込まれていくという、現代ならではの戦争が始まってしまいました。

誰が好き好んで戦争をするのでしょうか？戦いの現場では若者たちが、その家族たち、みんな平穏な日常を望んでいます。ほとんどの人たちが平和を望んでいるにも拘らず、いまだ世界平和への道は遠くなっています。

「戦争体験を語り継ぐ」というシンプルな方法ですが、体験された方から実際のお話を伺うことは、私たちが安心して暮らせる平和を守り、命を大切にできる日常を守りたい、という思いを、改めて確認し、意識する時間となります。それが私たちの心に平和の灯をともし続けることにつながると思っています。

今年は「戦時体験記録集」の変遷をまとめてみました。集い開催は３０回を越え、記録集第 28 集まで発行し、すでに歴史という重みをもち始めていることを実感しています。

戦時体験記録集の「発行に向けて」「編集後記」などから見る変遷

第６回「戦争体験を語り継ぐ集い」の年から「緑区民の戦時体験記録集」が作り始められました。

また、その前年には、集い継続のために運営委員会の打ち合わせ内容、当日のアンケート集計結果、参考資料などがまとめられた冊子が作られています。（戦争体験を語り継ぐ集い記録集 1992.8.9.発行）その中には 8 月の終戦記念日に合わせて開催すること、語り継がれる対象が小中高生だけではなくその親世代まで広がっている、かたり部さんの高齢化を危惧すること、緑区という地域の特性への思い、広報の方法に悩むことなどがつづられています。記録集は第２３集まで、故橋詰四郎さん自身が編集をされています。

以下、特徴的な動きをまとめてみました。

第１集（1994 年：平成５年）
- 敗戦の年に亡くなられた方にとっては五十回忌を迎える節目
- 体験者の高齢化に「急がなければ」との強い思いで作成にとりかかる
- 子どもたちに伝えたい強い想いを持ちながらも、内容の性質から子どもが読みこなすことが難しいものになったジレンマを抱える
- 思い出すには辛すぎる体験をあえて言葉に綴られた体験者への謝辞
- 前年の集いですいとんづくりを担当された方の想いも掲載

第２集（1995 年）
- 沖縄・広島・長崎などの惨状や敗戦後のシベリア抑留の現状が忘れ去られていくことへの危機感
- 地域に住まわれる体験者の心の叫びを聞いていくことの価値
- ささやかで見栄えもしない記録集だが、最も着実でゆるぎのない平和への取り組みであるという強い使命感

第３集（1996 年）
- 記録集作成にあたり、寄せられた体験に涙しながら、手を止めながら、また編集作業に戻る
- 同じ体験者であるがゆえのしんどさが綴られている

第４集（1997 年）
- オリジナル曲作成
- 実行委員会メンバーが知人に依頼してオリジナル曲が作られた

戦争体験の歌《ごめんなさいお母さん》

作詞：実行委員会　作曲：坂手尚子

この曲は緑区民の方で、中学２年生の時に広島で原爆にあわれた実話をもとに、実行委員会メンバーと住民の協力により作られた。

第５集（1998 年）

オリジナル曲作成のきっかけとなった沢田昭二さんが投稿。

第６集（1999 年）

平和な時代だからこそ、思いの丈を綴られる。平穏が破られると言葉さえ不用意には出せなくなる。相手を警戒し、猜疑心と不安を胸にコミュニケーションすることになる。「共生の時代」に向けて、お互いの信頼と助け合いの上に築く社会をめざし平和を守っていく姿勢が求められる。

第７集（2000 年）
- 名称変更「緑区民の戦時体験記録集」⇒「戦時体験記録集」
- 体験者の高齢化により緑区民のみの投稿が限界となる
- 「くらしの作文より」の投稿を掲載（中日新聞社提供）

第８集（2001 年）

第９集（2002 年）

第１０集（2003 年）

第１１集（2004 年）
- 平和な時代の入園式を目の当たりにし、この子たちに戦争という悲惨な体験をさせてはならないと思いを強くする。

第１２集（2005 年）
- 終戦から６０年の節目の年。平和憲法を守る重要性を再認識。東郷町立諸和中学のご協力により「祖父母たちの太平洋戦争」が綴られている。（第１５集まで続く）

第１３集（2006 年）

第１４集（2007 年）
- 日本国憲法施行６０年目にあたる

第１５集（2008 年）
- この冊子が戦争の愚かさと悲惨さを伝え、戦争を美化、利用する人々の動きを阻止する原動力になることを願う

第１６集（2009 年）
語り部の話の要約を掲載し始める。「この苦しみは私ひとりがあの世まで持っていく」と誓った体験者。高齢になり孫を抱いた瞬間に誓いを破る。「孫に同じ思いは絶対にさせたくない」と、苦々しい体験を語り始める。
第１７集（2010 年）
太平洋戦争敗戦から６５年を迎える
第１８集（2011 年）
太平洋戦争開戦から７０年になる
「棄民のあしあと」から抜粋し原稿を掲載誌始める。
第１９集（2012 年）
この記録集が戦争に待ったをかける一助となることを切に願う
第２０集（2013 年）
初心に戻り限りなく初版集に近い復刻編集に努めた
第２１集（2014 年）
親より先に死なせてはいけない、親より先に死んでもいけない、先ず、人種・宗教間の争いをなくしたい
第２２集（2015 年）
７０年前、日本全土が燃えて終戦を迎えた
平和の尊さとありがたさを知る
平和を守り命を守ると決めた
第２３集（2016 年）
センターと協働して開催する意義を顧みる
戦争を知らぬ人達が、戦争体験者・語り継ぎ者を探し、毎年毎年繋いでこうと開催している
第２４集（2017 年）
編集者が変わり、形式も変わったが、変わらぬ思いを受け継ぐ
知ってください　触れてください
子どもたちの未来に
愛と平和の実現を創造するために
戦争になると　人が人ではなくなります
命が命ではなくなります

第２５集（2018 年）
戦争体験を語り継ぐ集いは３０回を迎えた
戦時体験記録集は第２５集となる

舞鶴引揚記念館と復員桟橋を目にし、「平和を守る思い」を新たにする
第２６集（2019 年）
令和の時代を迎える。
未だ不発弾が見つかり処理される
戦争を遠く離れた国のことではなく、自分のこととして考えよう
第２７集（2020 年）
世界を震撼させた新型コロナウィルス感染症
感染予防のため集いは開催できず、記録集のみ発行した
人と人が分断され、自然や温もりからかけ離れたところで生きる人々
平和は、つながり合うところから生み出される
人と人との触れあいを考えさせられる一年だった
第２８集（2021 年）
情報リテラシーの必要性

名称変更
「緑区民の戦時体験記録集」を「戦時体験記録集」と名称変更
現在、体験者の超高齢化により、語り部としてお話しいただくことが非常に難しくなっている
今また「戦時体験記録集」も名称変更を迎える時期になっている

仕上げ形式の変遷
第１～５集：Ａ５版（縦書き）
第６集：Ａ４版（横書き）
第７・８集：Ａ５版（縦書き）ふりがな付き
第９～２３集：Ｂ５版（横長の縦書き）
第２４集～今に至る：Ａ４版（横書き）

※名古屋市内の社会教育センターは１９９７年（平成９年）４月に生涯学習センターと名称変更した。　＊来年へ続く＊（文責：荒川淳子）

編集後記

私たちの願いを叶える日が遠のくような現実を突きつけられています。ウクライナとロシアの戦争です。この時代の特徴である「情報戦」と言われる虚像をも生み出す社会が、今、現実を混沌とさせているようです。

新型コロナウィルスの蔓延、ウイルス変異に追いつかないワクチン開発、ワクチン接種の是非、加えて世界を巻き込む戦争が始まり、二極化がより深まっていくのではないかと危惧する日々です。

性悪説、性善説、人間の性という、理想では語れない側面は、確かにあるでしょう。けれど、つながりあう人たちも、ネットワークも、確かに存在しています。つながりあいから紡ぎ出される平和を育んでいくことが大切だと感じます。対岸の火事とせず、間接的に戦争加担をしていないだろうか？問いかけていく先に平和が訪れることを願うばかりです。

私たちは「祈り」という「穏やかな手段」を持っている国民であることを思い出しています。「祈りの波動」は地球をさざ波のように包んでくれると信じます。

今年も平和へ祈りと願いを込めて、編集後記といたします。

＜第２９集＞戦時体験記録集

令和４年７月２３日発行　戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

＊この冊子は古紙パルプを含む再生紙を使用しています＊